立教大学展示館で展示中のアメリカ強制収容所関連図書

①『アメリカの汚名：第二次世界大戦下の日系人強制収容所』
リチャード・リーヴス著　園部哲訳　　白水社　2017

原著 Infamy：the shocking story of the Japanese American internment in World War II 2016 年刊。リチャード・リーヴス氏は元ニューヨークタイムズ政治部長。ニューヨーカー、エスクワイワィアなどのコラムニスト。歴代大統領の伝記など著書多数。南カルフォルニア大学で教鞭を取っている。氏は、ロサンジェルス郊外から北へスキーなどをしに行くときに、砂漠の真ん中に立つ「マンザナー戦時転住センター」の看板を見て、いつも車を停めなければと思い、通り過ぎていたという。氏の出身地であるニューヨークや東海岸では、そうした日系人収容所の問題に対して、概して関心が薄い。アメリカの歴史教科書のなかでも日系人強制収容については、もっぱらヒロイックな第二次世界大戦の記述の後に、小さな注釈としてしか扱われていない。

しかし、歴史は繰り返す。この戦時ヒステリック的な出来事の源流は、“アメリカ先住民の扱いから始まり、アメリカ革命後の英国王党派に対する迫害、アフリカ人の奴隷化、第一次世界大戦後のドイツ系アメリカ人への扱い、・・・などに行き着く。”という。また至近なところでは現大統領の政策にも通じると著者は語る。

章立ては、第一章「真珠湾」から始まり、第 10 章「家に帰る」まで、在米日系人の戦時中の非人道的な状況の移り変わりを時系列な章立てで描き、ドラマ的な表現となっている部分もあるが、みな裏付けのあるノンフィクションであり、これまでに出版された関連書籍や膨大な資料を集大成するような構成にもなっている。

23. アンセル・アダムスのカメラに向けて屈託のない顔を見せる収容所住民、ウルタニー家。アダムスは不満だったが、収容所暮らしを長い休暇のように見せたかった政府の意には逆うイメージになった。

24. 大食堂で子どもは友だちと一緒に食べたがり、家族はばらばらになった。『マンザナールよさらば』の中で、著者ジーン・ワカツキ・ヒューストンは、「3年間の大食堂で、私の家族はまとまりを失った」と言いた。

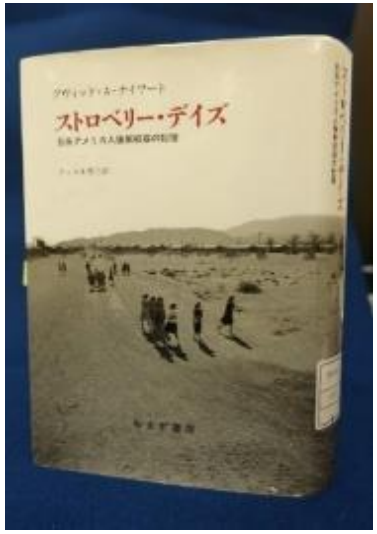
25. 若者の多くは収容所で自由を謳歌した。チヨ・クスモトは言う。「夢のようだった。競馬場の観覧席に行けばレコードがかかっていて、

20. アンセル・アダムスの作品。監視塔から見たマンザナー収容所。荒涼とした土地だったが、収容された農民や野菜栽培者は砂漠に緑をもたらすことに成功した。

21. ロサンジェルス出身の著名な写真家、トウヨウ・ミヤタケがひそかに撮ったマンザナー有刺鉄線と監視塔の写真。彼は弁当箱にしか見えない箱の中にカメラを仕込んだ。

22. 1943年、大統領夫人エレノア・ローズヴェルトが戦時転住局長のディロン・マイヤーとヒーラリバー収容所を訪れた。その年の春、彼女の夫が西部軍事基地を訪れた際、日系アメリカ人兵士は大統領の目

②『ストロベリー・デイズ：日系アメリカ人強制収容の記録』
デヴィッド・A・ナイワード著　ラッセル秀子訳
みすず書房　　2013



原著は 2005 年刊。著者ナイワード氏は、シアトル在住のジャーナリスト。近郊のベルビューという一都市の帰米二世トム・マツオカ氏に焦点を当て、戦前の日系人社会の誕生から発展、そして戦時中の強制収容による崩壊を描く。

アメリカ西海岸の日系人の歴史は古い。1890 年代日本からはじめて移民が来たとき、ベルビューは鬱蒼として原生林だった。白人男性の労働力が少なく日系人ははじめ伐採業に従事した。

日系人より前にやって来た移民は中国人だった。1849 年のゴールドラッシュ時代に迎え入れられ鉄道事業にも労働力を提供した。しかし中国人排斥法が生まれ、シアトルから強制退去させられていた。

日系人移民が開墾した近郊のワシントン州ベルビューに確立した日系人コミュニティー、当初から強い人種的差別はあったが、日系一世の努力で荒れ地が開墾されイチゴ畑が成功し、シアトルなどの住民とも友好な関係が築き上げられていた。しかし 1941 年 12 月の真珠湾攻撃に対抗して始まった日系人強制収容は、根こそぎ日本人社会を破壊した。

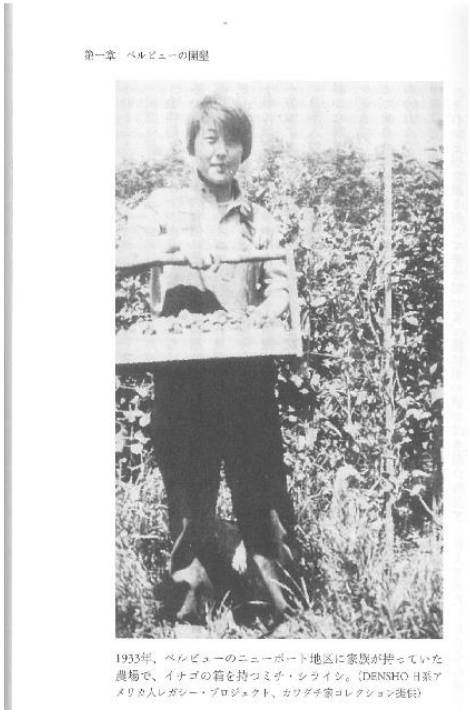
ベルビューの日系人住民は、一部の者は嫌疑をかけられ軍基地に連行され、大多数の住民約 300 名はまずカリフォルニアのパインデールの「集合センター」（仮収容所）に移送され、砂漠の砂が吹き込みトイレの仕切りもないバラックの中で暮らし、数か月後に完成したばかりの最大規模の 16,000 人収容のカルフォルニア州ツールレイクの「転住センター」（relocation center）に移された。

その後ツールレイク収容所では、転住についての地元の反対運動や、陸軍が二世部隊を作ることを決定し忠誠登録や徴兵書式が配られたことによって、収容者は動揺し、署名する者と拒否する親日的な「ノーノー派」の対立による暴動が起きた。他の収容所でも同様な事件が起きた。ほかの収容所に移る選択肢も与えられ「イエスイエス派」のベルビュー住民は、平和なことで知られるミニドカ強

制収容所に移り、まとまって収容されていたベルビューの住民は分断された。

同書は、さらに志願兵となった日系二世のヨーロッパ戦線での果敢な闘いと戦死者について（第 5 章当たって砕けろ）具体的な事例で説明し、第 6 章「遠い家路」では、戦争が終わりベルビューに戻ろうとした住民が、遭遇した地元の日系人排斥運動などに実際のインタヴューなどに基づいて詳説されている。

訳者は、カリフォルニア州モントレー在住のモントレー国際大学助教授であるが、モントレーにも同じようにアワビ漁業を営む日系人社会があったが、そのコミュニティは同じように崩壊したという。



1933年、ベルビューのニューポート地区に家族が持っていた農場で、イチゴの箱を持つミチ・シライシ。（DENSHO 日系アメリカ人レガシー・プロジェクト、カワダチ家コレクション提供）

ベインブリッジ島でフェリーを待つフミコ・ハヤシダ（ベルビューで家族が1903年から1910年まで農家をやっていた）と11か月の娘ナタリー。マンザナール収容所への旅の始まり。ハヤシダは強制退去の数日前、妊娠していることがわかった。（歴史産業博物館、シアトル・ポスト・インテリジェンサー・コレクション提供）

ミードカ収容所の通路を歩く子どもの収容者。1943年冬。（ウィング・ルーク・アジア博物館、ハスト家コレクション）

③『親愛なるブリードさま：強制収容された日系二世とアメリカ人図書館司書の物語』ジョアンヌ・オッペンハイム著　今村亮訳　　柏書房　２００８

児童文学者のジョアンヌ・オッペンハイム氏は、2001 年たまたま高校卒業 50 年周年の同窓会を開くために、当時クラスに転校してきた日系人エレン・ユカワの消息を google で検索していたが、偶然、全米日系人博物館のサイトにサンディエゴ公共図書館司書のクララ・ブリードさん宛に夥しい数の日系人の古い手紙のコレクションがあるのに気がつくことになった。

手紙の送り主は、戦前にサンディエゴ公共図書館をよく利用していた日系人の小中高校生たちで、第二次世界大戦がはじまった直後、家族とともに各地の収容所に送られることになった。収容後も子どもたちは、収容所から惨めな状況をブリードさんに書き送ったり、本を送ってもらったり、物資のサポートを受けたりして、文通が収容所を出るまで続いた。数々の手紙はブリードさんが全米日系人博物館に寄贈したものだった。

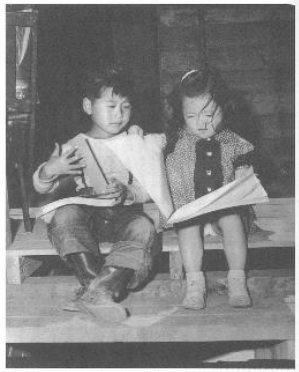
さらにブリードさんは自分の信念に基づいて、周囲からの誹謗中傷などに負けず、職場の同僚などと共に全国図書館大会で日系人児童利用者の非人道的な現況について発表、雑誌へ寄稿し、サンディエゴ公共図書館長になって以後も、日系人への賠償についてレーガン大統領に手紙も書いていた。オッペンハイム氏は、全米日系人博物館のサイトで手紙の内容を読み心打たれ、クララ・ブリードさんについての本を書くことを決意することになった。

オッペンハイム氏たちの同窓会は 2001 年 9 月前のニューヨークで開かれた。その後すぐに同時多発テロが起き、まず心に浮かんだのは、またも戦争に突入するのではないかという苦悩と、日系人に起きたことと同じようなことが、アラブ系アメリカ人に起きるのではないか、という懸念だった。

同書の多くの部分は、子どもたちからブリードさんに宛てた手紙、その背景にある収容所での生活の解説、各種資料からの写真などで、当事者たちからインタビューした内容など、子どもたちとブリードさんの心温まる物語ともなっている。

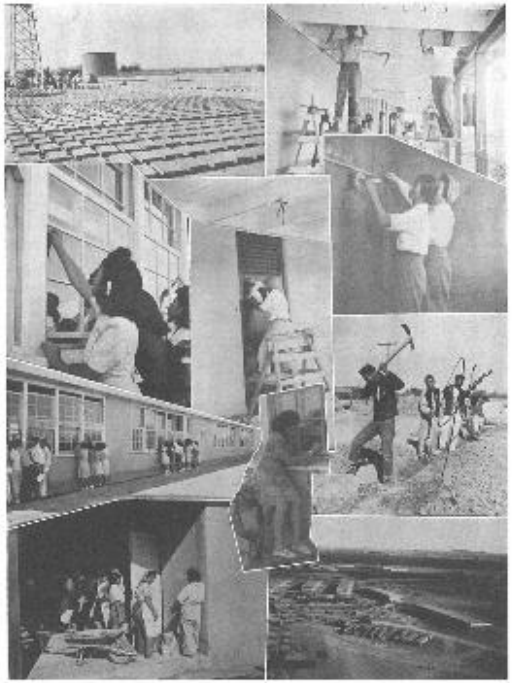
クラー E. フリード
1950年代後半、ランディニコ市立図書館の司書補佐[illegible]

[illegible]のスピードで建設され、まったく同じ作りの[illegible]棟ずつのバラックの姿が見渡す限り並んでいる。やがて[illegible]は二つを除いていくつもの小さな[illegible]を作り、二つ[illegible]の家族の持ち[illegible]わけ等[illegible]作り変えた。



[illegible]

テツはクララに散髪道具を送ってもらい、写真のように自分の住むバラックの外で店を開いた。収容所内にも理髪店はあったが、屋外の店の方が愛想よく、おまけに安かった。



「キャンパス・ニュース」ポートン 1944年
[illegible]

[illegible]

[illegible]年にわたりランディニコ市立図書館で働いたクラー E. フリード。この写真は1954年に新図書館が完成した後に撮影されたものと思われる。

（4）『尊厳の芸術：強制収容所で紡がれた日本の心：Art of Gaman』デルフィン・ヒラスナ著　国谷裕子; 山本映子翻訳・編集協力　NHK 出版 2013

日系アメリカ人三世デルフィン・ヒラスナ氏著、ＮＨＫニュースキャスター国谷裕子氏監訳による、主に日系人一世が強制収容所内で製作した工芸品、日用品、美術品などの写真集。日系人強制収容についての歴史的な背景や経緯についても解説が載せられている。これらの作品は、2010 年にＮＨＫの『クローズアップ現代』で国谷氏に取り上げられ、展覧会「Art of Gaman［我慢］」が 2012 年東京芸術大学美術館で開催された。

出版のきっかけは、戦後生まれ三世のヒラスナ氏が母の死後に物置小屋にあった遺品の木箱の中の小鳥のブローチだったという。ヒラスナ氏は、両親たちが収容所での暮らしを話題にするのを度々耳にしていたが、強制収容所のことは教科書にもなく、日系人とそうでない人が一緒のときは、話題になることは決してなかった。遺品のなかから出てきたものは、著者の育ったカリフォルニア州の農場で働いていた一世（祖父）たちの「風雨にさらされた日焼けした顔」や「革のようなごわごわした手」を思い出させた、という。また一世たちはよく「シカタガナイ」と言った後に「ガマンするしかない」と付け加えた。

三世である著者たちは、実際には収容生活を知らないが、中心となって日系アメリカ市民同盟（ＪＡＣＬ）によって政府に謝罪と賠償を求める運動を 1970 年代に起こし、1988 年に議会は、第二次世界大戦中に合衆国によって市民の権利を侵害された日本人を祖先に持つ人々への大統領の謝罪と、一人 2 万ドルの損害賠償を行うという「市民の自由法案」を可決した。

120 点におよぶ写真と作品は、国立公文書館、議会図書館、日米資料館、全米日系人博物館などの

ほか、数多くの個人から提供されたものである。

（5）『コダクロームフィルムで見るハートマウンテン日系人強制収容所』ビル・マンボ写真　エリック・L・ミューラー編　　岡本ひとみ訳　紀伊国屋書店 2014

原書は、『Colors of Confinement: Rare Kodachrome Photographs of Japanese American Incarceration in World War Ⅱ 1942-44』(2012)。同書は、最近アメリカ国立公文書館（NARA）で見つかった記録写真である。日系二世のビル・マンボがハートマウンテン収容所で家族を撮影したカラー写真をもとに、ノースカロライナ大学教授のミューラー氏が編集したものである。

当時としても珍しい最新のコダクローム（コダック社製の高画質フィルム）で撮影されており、同書を広げてまず驚かされるのは、70 年以上前のカラー写真の鮮やかさ、また職業写真家ではないマンボ氏が撮影した家族や他の収容者の生き生きとした姿である。日系人強制収容所内の写真は、意外に多くの公的な記録写真や、アンセル・アダムス氏による写真集などが知られているが、同書の写真で特徴的なことは、作為的な部分が含まれにくい、素人が撮影したヴァナキュラー（日常的）なフィルムという点である。訳者のあとがきにもあるように、読む者に複雑な印象も与える。

同書の構成は、デューク大学のドキュメンタリー研究センター教授ランキン氏による①序文、編集

責任者のミューラー氏による②「フレームの外側：ビル・マンボの写真の時代背景」、日系二世としてハートマウンテン収容所で同時期に収容生活をしたベーコン・坂谷氏（『ローン・ハート・マウンテン』にも執筆）による③「有刺鉄線の向こうの若者の日常」、ウィスコンシン大学でパブリック・ヒストリーの講座を開いているジャスミン・アリンダー准教授による④「収容所のなかのカメラ：ビル・マンボの写真にみるヴァナキュラーな写真の力」、エスニシティを専門とする南カルフォルニア大学教授ロン・クラシゲ氏による⑤「日系アメリカ人研究に開く新しい扉」、それぞれの見方からなる 5 つの文章も収録されている。

（6）『ローン・ハート・マウンテン：日系人強制収容の日々』
エステル・石郷絵・文　古川暢朗訳　　石風社　１９９２

白人女性画家のエステル・石郷氏によるハートマウンテン強制収容所内での記録画と文章。原題は『Lone Heart Mountain』、1972年刊。1989年にハートマウンテン高校の同窓生により再版される。

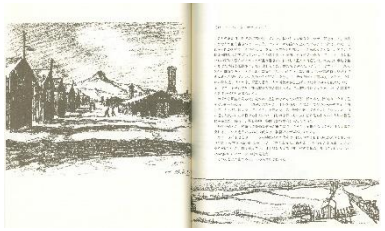
著者・画家は、1899年カリフォルニア州オークランド生まれ。画家の父、オペラ歌手の母のもとに生まれ、ロサンゼルスの美術学校で俳優志望の日系二世、アーサー・シゲハル・石郷氏と出会い、白人と有色人種の婚姻が許されていなかったカルフォルニア州ではなくメキシコで結婚した。

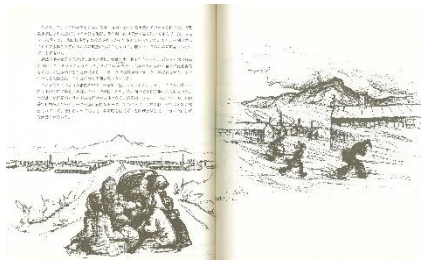
1941 年開戦の後、日本人の血が少しでも流れる者は西海岸から離れるか、陸軍監督下の収容所に入所するよう命令が下り、転居する費用もなく、1942年からワイオミング州のハート・マウンテン強制収容所に抑留される。夫人は所内唯一の白人であった。

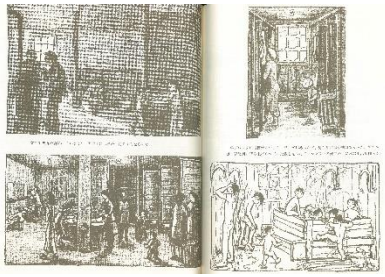
立ち並んだバラック状態の風も吹きこむ家屋に一家族一部屋が原則で、トイレにドアも無かった。首都ワシントンに送る報告書のためスケッチを書き始めた。苛酷な生活に耐え、広島・長崎そして戦争が終わった。各人に目的地までの交通の便宜と25ドルが支給され、西海岸に戻ることも許されたが、外部では偏見の炎が燃えており、大半のものが不動産を盗まれたり破壊されたりしていた。ロサンジェルス郊外に住んで貧しい生活を送った。不動産損失手当金を受け取ったが日本人でない彼女には 100 ドルしか支給されなかった。1957年夫アーサーがガンで亡くなる。

戦時中ハートマウンテンで描いた絵が、アメリカ歴史協会により認められ、1972年展覧会が開か

れ米国内を巡回した。その後壊疽のため両足を切断し極貧に苦しむ。1984 年同じハート・マウンテン収容所の保存活動を熱心に行っているベーコン・坂谷氏が彼女を探し出し、援助の手をさしのべる。1990 年死去。1991 年『ローン・ハート・マウンテン』をベースにした「待ちわびる日々――エステル・イシゴウの生涯と芸術」がアカデミー賞受賞。（ドキュメンタリー短編部門。監督スティーヴン・岡崎）1992 年日本語版が出版される。







（7）『祖国のために死ぬ自由：徴兵拒否の日系アメリカ人たち』/ E.L. ミューラー著 ; 飯野正子監訳　飯野朋美、小澤智子、北脇実千代、長谷川寿美訳　刀水書房 2004

「なに、徴兵拒否？日系アメリカ人の収容者が徴兵拒否したとは、いったいどういうことだ。合衆国政府は不忠誠の嫌疑で日系アメリカ人を強制収容しておきながら、今度は彼らを徴兵して戦場に送ろうとしたなどということがあり得るだろうか」アメリカ人である著者は、あるとき１枚の写真を目にして自問した。

　表紙の写真は、大理石をめぐらせた連邦裁判所の一室に集まった若い日系人二世の青年 63 人である。

　著者は当時、ララミーにあるワイオミング大学の法科大学院の教員で、ことに日系人強制収容に興味を持っていたのは、父親がナチス政権下のドイツから逃れたユダヤ人亡命者の息子だったからである。ゲシュタポによって祖父はナチスの強制収容所に一時拘引されたが、スイスを経由してアメリカに亡命しニュージャージーに住んでいた。しかしアメリカとの開戦後は、なんと「敵性外国人」として扱われてしまい、西海岸の日系人と同様に、政府の許可無しに 8 キロ以上の外出が禁止された。ナチスに忠誠を誓うドイツ人のように取り扱われたのである。日系人がアメリカの強制収容所に収容されたことも、アメリカ人として第二次世界大戦に参戦していたことも知っていたが、その全員が「志願兵」と思い、「徴兵」され、また徴兵を拒否した日系人がいるとは全く思っていなかった。

　さらに著者は、同じ写真を一年後にスミソニアン博物館でも見た。そこのキャプションには、数百人もの日系二世が徴兵を拒否した、と記述してあった。ワイオミングに戻ると著者は、大学図書館にも日系人の強制収容に関する図書は多数あり、1990 年代には「ヒマラヤ杉に降る雪」といったベス

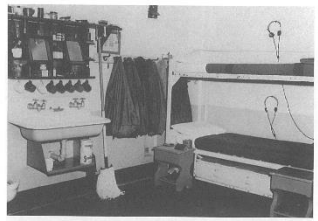
トセラー小説がアメリカで映画化もされたが、「徴兵拒否者」についての研究は為されていないのに気づかされた。著者はそうしたテーマの研究について大学から Faculty Growth 賞の基金を得て、多くの日系人にインタビューし、著書が出版された。原題は、『Free to Die for Their Country』。

書名が示すように戦争は、日系人一世にも二世にも、また全米日系アメリカ人協会（JACL）や WRC（戦時転住局）にとっても矛盾する命題を突き付けた。首都ワシントンには 2000 年に愛国心を讃える全米日系アメリカ人記念碑が建てられ、下記のような詩文と戦死した 800 人近くの二世兵士の名前が刻まれている。

日本人の血／アメリカ人の心／不屈の名誉を持って／不正義の針に耐えた／次世代のために

上空から見たマクニール島　1941 年、写真中央の大きな建物がビッグハウス（連邦矯正局蔵）

マクニール島のビッグハウスの監房棟（連邦矯正局蔵）



マクニール島のビッグハウスの 10 人用監房（連邦矯正局蔵）

マクニール島からの釈放日に刑務所から支給された背広を着たハートマウンテンの徴兵拒否者　1946 年 7 月 14 日、最後列左から 2 番目がヨシタケ・ヒヤ（ヨシ・クロミヤ提供）